日本 LD 学会第22回大会報告

柘植　雅義
（教育情報部）

要旨：2013年10月12日（土）から14日（月）までの３日間，一般社団法人日本 LD 学会第22回大会が，本研究所が開催当番となってパシフィコ横浜で開催された。今回の大会は，「多様なニーズへの挑戦－たて糸とよこ糸で織りなす新たな教育の創造－」というテーマであった。3,400名近くの参加者があり，本学会の過去最高となった。３日間に，LD をはじめとする発達障害に関する教育，心理，福祉，医療等の講演やシンポジウム，ポスター発表等が行われ，多くの会場が参加者で溢れた。海外から，オランダ在住のリヒテルズ直子氏と，米国カンザス大学教授のドナルド・デシュラー氏が招聘された。また，特別講演として，京都大学霊長類研究所教授の松沢哲郎氏，東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美氏が登壇した。
見出し語：日本 LD 学会，大会報告，LD（学習障害），発達障害

Ⅰ．大会の概要

一般社団法人日本 LD 学会の第22回大会が，本研究所が開催当番となって開催された。大会会長が柘植雅義，事務局長が小林倫代で，本研究所の研究員らで構成された実行委員は23名にのぼった。

日本 LD 学会は，昨年（2012年）設立20周年を迎え，会員は8,000名ほどに急成長してきた学術学会である。会員は，教育，心理，医療，福祉，行政，そして，研究者のみならず，各種学校や幼稚園等の教員，専門職，保護者等，実に多彩である。

今回の大会は，「多様なニーズへの挑戦－たて糸とよこ糸で織りなす新たな教育の創造－」というテーマで，2013年10月12日（土）から14日（月）までの３日間開催され，会場は，横浜みなとみらい地区のパシフィコ横浜（国立大ホール＆国際会議場）であった。

大会期間中は天候に恵まれ，本学会で過去最高の3,400名近くの参加があった。大会の前後は，いくつもの台風が日本列島を襲ったので，まさに台風の合間での開催だった。

大会１日目は，参加者全員が一つのホール（3,500名ほど収容可能）に入って，同じプログラムを共有していただいた。

特別講演Ⅰとして，オランダ在住の教育・社会研究家で日本イエナプラン教育協会代表の Naoko Richters（リヒテルズ直子）氏による「多様な能力へのニーズとインクルージョン教育の本質－国際化時代の教育先進事例としてのオランダの教育－」，特別講演Ⅱとして，京都大学霊長類研究所教授の松沢哲郎氏による「想像するちから－チンパンジーが教えてくれた人間の心－」，そして，特別講演Ⅲとして，東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美氏による「子どもの学びの多様性と保育・授業」が行われた。

その後の大会企画シンポジウム「多様なニーズを踏まえた『豊かな学び』と『確かな教え』」では，特別講演者のリヒテルズ直子氏，松沢哲郎氏，秋田喜代美氏の３名に，指定討論者として，横浜国立大学教育人間科学部教授の渡部匡隆氏，S.E.N.S の会神奈川支部会長でお茶の水女子大学学校教育研究部教授の安藤壽子氏の２名も交えて，活発な協議が行われた。

大会２日目は，米国カンザス大学教授の Donald Deshler（ドナルド・デシュラー）氏による「学習障害のある子どもに明るい未来を創造する RTI の実践」という特別講演が行われた。そして，RTI に関するシンポジウム，包括的アセスメントと指導・支援に

写真１　開会式前

写真２　大会会長講演テーマ

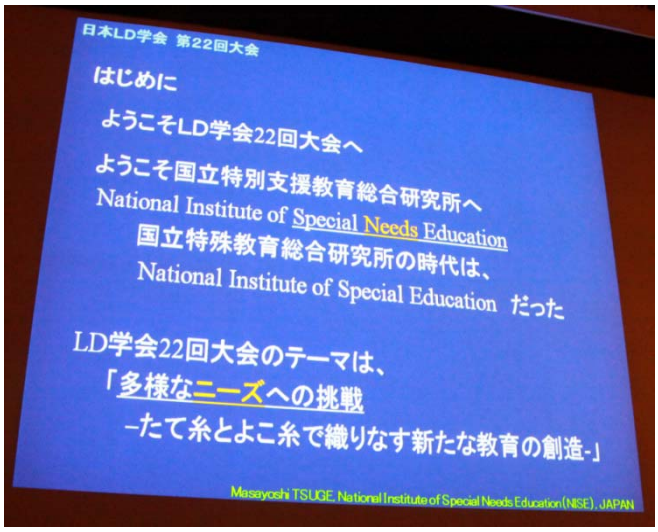

写真３　ようこそ学会へ，ようこそ研究所へ

関するシンポジウムと併せて，丸１日を通してアセスメントについて考える機会となった。　３日間で，特別講演４，教育講演８，学会企画シンポジウム２，大会企画シンポジウム10，ポスター発表243，自主シンポジウム56，研究委員会シンポジウム１，編集委員会企画１，親の会シンポジウム１，英語によるラウンドテーブル１，等が行われた。

Ⅱ．プログラムの紹介

１階席だけで3,500人ほどが収容可能なパシフィコ横浜・国立大ホールで，終日，大会１日目のプログラムが進行した。

開会式では，大会会長（柘植雅義）及び学会理事長（上野一彦）の挨拶に続いて，祝辞と来賓挨拶があった。

下村博文文部科学大臣から寄せられた祝辞が，文部科学省初等中等教育局特別支援教育課長の大山真未氏により代読された。

来賓挨拶は，大山氏と，大会会場のある横浜市教育委員会教育長の岡田優子氏からなされた。お二人の挨拶は，発達障害の教育や研究に携わる参加者にとって，とても勇気づけられるインパクトのあるものであった。

本大会のテーマは,「多様なニーズへの挑戦－たて糸とよこ糸で織りなす新たな教育の創造－」であった（写真２）。

大会会長の講演では,「現代は，教室や学校が多様性に溢れている。発達障害のある児童生徒等の存在も，その要因の一つである。そのような多様性溢れる教室や学校において，全ての児童生徒等の確かな学びを支援していくことが今，求められている。まさに，多様なニーズへの挑戦である。その際には，時間軸であるたて糸と，空間軸であるよこ糸を上手い具合に織り込んでいくことで新たな教育を創造していこうとすることが大切である」といった内容が語られた。

さらに続けて,「開催当番となった国立特別支援教育総合研究所の英語表記は“National Institute of Special Needs Education”である。国立特殊教育総合

写真４　特別講演Ⅰ（リヒテルズ直子氏）

写真５　特別講演Ⅱ（松沢哲郎氏）

写真６　特別講演Ⅲ（秋田喜代美氏）

研究所の時代は“National Institute of Special Education”であった。つまり，Needs（ニーズ）という語が加わった。本大会のテーマである『多様なニーズへの挑戦』にもニーズとあるように，特別支援教育は，一人一人と多様なニーズにいかに対応していくかがポイントとなっている」といった内容が語られた（写真３）。

オランダ在住の教育・社会研究家で日本イエナプラン教育協会代表のリヒテルズ直子氏による特別講演Ⅰは,「多様な能力へのニーズとインクルージョン教育の本質－国際化時代の教育先進事例としてのオランダの教育－」であった（写真４）。

オランダでは,「教育の自由」原則に基づき学校と教員の自由裁量が高く，このことが，オランダの教育の特徴であること，その上に，特別支援教育が構築されていることが紹介された。そして，近年導入された「民主的シチズンシップ教育」は，広く究極的な意味でのインクルージョンへの転換点ともいえる，とのことであった。

京都大学霊長類研究所教授の松沢哲郎氏による特別講演Ⅱは,「想像するちから－チンパンジーが教えてくれた人間の心－」であった（写真５）。

アイと名付けたチンパンジーをパートナーとして継続して研究を進めてきたことが，結局は，人間の心を理解する大きな助けとなっていることが強調された。そして，文字や数字の学び方，子育ての仕方等の点から，チンパンジーの教育は，「教えない教育・見習う教育」だという。

そして，それに加えて，人間は，ことばで教えるようになった。人間の教育を考える際，チンパンジーから学ぶことは多いという。

東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美氏による特別講演Ⅲは，「子どもの学びの多様性と保育・授業」であった（写真６）。

通常の学級の授業を考えていく際に,「安心・居場所感」,「没頭・夢中」の視点が大切であり，これらの視点から子どもの生きられた経験を保障できたかどうかで，教育の質の向上の手がかりが見えてくる

写真７　大会企画シンポジウム①

写真８　大会企画シンポジウム②

写真９　ドナルド・デシュラー氏特別講演

という。

そして，保育や授業で子どもの多様な学びを保障していくには，「回り道」を捉える目が大切であり，学びの保障においては，子どもの言語化されたものだけではなく，多様な子どもの多様な表現様式が重要でもあるという。

特別講演者のリヒテルズ直子氏，松沢哲郎氏，秋田喜代美氏の３名に，指定討論者として，横浜国立大学教育人間科学部教授の渡部匡隆氏，S.E.N.S の会神奈川支部会長でお茶の水女子大学学校教育研究部教授の安藤壽子氏の２名に加わっていただき，大会企画シンポジウム①「多様なニーズを踏まえた『豊かな学び』と『確かな教え』」が行われた（写真７）。

神奈川県で活躍する，特別支援教育の専門家である両氏による指定発言を軸に，３名の話題提供者との間で，とても興味深い協議が進んだ。

大会２日目からは，会場をパシフィコ横浜・国際会議場に移して，様々なプログラムが実施された。特に，大会２日目の午前，メインホールで行われたのが，大会企画シンポジウム②「我が国における RTI を基にした多層指導モデルへの期待と課題」であった（写真８）。

RTI（Response to Intervention/Instruction）は，近年，米国で注目されている指導実践であり，その日本国内での実践例や有効性，そして，課題等について協議が進んだ。

その後，下記に述べる，ドナルド・デシュラー氏の特別講演，さらにその後の関連シンポジウムへと繋がっていった。

米国カンザス大学教授のドナルド・デシュラー氏による特別講演は，「学習障害のある子どもに明るい未来を創造する RTI の実践」であった（写真９）。

学習と行動にニーズのある子どもを早期に発見し支援を行うための多層的アプローチである RTI の概念や構造，実施手続きから，その有効性，そして実践事例が紹介され，効果的に実践するためのポイントが整理された。

また，講演後には，別室の小部屋で，20名ほどの

希望者がデシュラー氏を囲んで，質疑応答も含めた和やかなディスカッション「英語によるラウンドテーブル」が行われた。

Ⅲ．他のプログラムの紹介

先に紹介した特別講演等の他に，各種のシンポジウムや教育講演の題目を紹介する。

大会長講演

・『多様なニーズへの挑戦』は『学び』と『教え』を如何に進化させるか

学会理事長講演

・インクルーシブ教育の中で LD 教育の次の課題を考える

学会企画シンポジウム

・特別支援教育の蓄積と展望－2012年度の全国調査から考える次の課題－
・改めて「LD とは何か」を問う－21世紀，LD 概念はどのように変わっていくか－

大会企画シンポジウム

・多様なニーズを踏まえた『豊かな学び』と『確かな教え』
・わが国における RTI を基にした多層指導モデルへの期待と課題
・脳科学と特別支援教育；最新の知見と脳科学迷信－脳科学所見の確かさと教育への応用可能性－
・発達障害のある人の就労とキャリア発達支援
・効果的な支援につながる包括的アセスメント
・通級による指導における多様なニーズにどう応えるか－新しい通級の在り方を考えるⅦ－
・発達障害のある子どもが学習にアクセスするための教科書のあり方について－紙の教科書からデジタル教科書まで－
・就学移行期における保護者への支援
・他障害から学ぶ発達障害のある子どもへの支援
・通常の学級における多様性に応じる支援の再考－集団と個への支援の統合－

教育講演

・特別支援教育の過去・現在・未来－自閉症者への支援を中心に－
・我が国における「合理的配慮」の在り方を探る－米国におけるアコモデーション・モディフィケーションとの比較検討から－
・情緒障害児短期治療施設における二次障害への対応
・ワーキングメモリと学習支援
・発達障害児者における有効な支援を考える－当事者の体験に学ぶ－
・DSM-5と特別支援教育への影響
・子どもの高次脳機能障害の理解と適切な支援
・学力の保障－制度と指導の両側面から－

研究委員会シンポジウム

・高等学校における学習障害の評価について

編集企画委員会企画研修

・実践論文の書き方

寸劇

・寸劇の可能性を探る

全国 LD 親の会企画シンポジウム

・学習への支援と教材の活用－一人一人の学びを保障する支援の在り方について－

自主シンポジウム

省略（56件）

ポスター発表

省略（243件）

Ⅳ．研究所の紹介コーナー

最も人通りが多いだろうと予想される会場の一角に，本研究所の沿革や現在の活動等を紹介するブースを設置した（写真10）。

沿革と活動については，それぞれ日本語と英語のパネルで紹介し，テーブルには，研究所要覧，発達障害教育情報センターのパンフレット，メルマガの案内等を展示して，本研究所について広く広報するブースとした。

たくさんの方が立ち寄ってくださった。

写真10　研究所の沿革や活動を紹介するパネル展示

Ⅴ．おわりに

本大会の準備には，日程の確定や会場の押さえ等から始まり，開催までに３年間以上の準備を要した。

大会実行委員の多くは，このような大会に参加したことはあるが，企画し準備し実行する経験は少なかった。今回，そのような逆の立場を経験したことで，改めて研究活動の面白さを実感し，研究者としての自信を強く持ち，研究力の向上に繋がったと感じる研究員も多かったのではないかと思う。

そしてまた，「おもてなしの心で招く」ということの大切さと，そうした時に「ありがとう」というような感謝の言葉と気持ちが返ってくるという，何とも言えないような心地良さを，本大会の期間中に，実行委員の皆が感じたことと思う。

引用文献

一般社団法人日本 LD 学会（2012）．日本 LD 学会第22回大会発表論文集．

一般社団法人日本 LD 学会．http://www.jald.or.jp/（アクセス日，2013-12-16）